

Title	看護における感情労働モデルの開発
Author(s)	片山, 由加里
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46374
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	かたやま やまざき ゆかり 片山(山崎)由加里
博士の専攻分野の名称	博士(看護学)
学位記番号	第 20199 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	看護における感情労働モデルの開発
論文審査委員	(主査) 教授 小笠原知枝 (副査) 教授 三上 洋 教授 阿曾 洋子

論文内容の要旨

【背景と目的】

看護師は、患者との相互作用において、自分自身の感情状態をその場に応じて調節しており、提供するケアには感情的な関わりが含まれている。Hochschild (1983) は、対人サービス職全般を対象として、仕事で求められる感情コントロールと感情表現を要素とする感情労働の概念を提唱している。しかし、看護師の感情的な関わりについて感情労働の観点からは十分に分析されていない。看護師の感情的な関わりを基礎としたケアのスキルを向上するためには、看護師がとる感情労働の要素を解明することが重要である。

そこで、本論文は、Hochschild の理論を基盤として、看護における感情労働を説明するモデルの開発を目的とした。具体的には、1)看護師の感情労働の構成要素を明らかにし、その測定尺度を開発する研究、2)看護場面における看護師の感情状態と認識が感情労働に及ぼす影響を明らかにする研究、3)患者の状態などの状況的要因が感情労働に及ぼす影響を明らかにする研究を実施し、看護における感情労働モデルを構築する。

【方法と結果】

研究 I. 看護師の感情労働測定尺度 (Emotional Labor Inventory for Nurses : ELIN) の開発

まず、文献検討によって、「看護師の感情労働」を、「看護師の感情を患者に対して適切に表現する行為」と定義した。次いで、文献とインタビューから質問項目を選出し、看護師と学生の調査によって質問項目の適切性を評価した。さらに、看護師 436 名を対象とした質問紙調査において項目分析と因子分析を実施し、5 因子 26 項目から構成される ELIN を作成した。5 因子は、感情表現に該当する「探索的理解」、「表出抑制」、「ケアの表現」と、感情コントロールに該当する「表層適応」、「深層適応」である。最後に、尺度の信頼性と妥当性を検討した。ELIN の信頼性では、Cronbach's α (0.92) による内的整合性と、再テスト法 ($r=0.72$) による安定性が確認された。ELIN の妥当性については基準関連妥当性と構成概念妥当性により検討した。前者は、ELIN と Emotional Labor Scale との相関 ($r=0.48$) によって、後者は看護師の共有経験と共有不全経験による ELIN の比較によって確認された。

研究 II. 看護師の感情と認識が感情労働に及ぼす影響

看護師 294 名が実際に経験した特定の看護場面における看護師の感情(苛立ち、悲しみ、嬉しさ、不安)と、看護

場面の認識（親近性、重要性、意向性、典型性、認知的許容量、正確性）、および、看護師の感情労働を自記式質問紙法によって調査した。その結果、看護師の抱いた苛立ち、悲しみ、嬉しさの感情が強い場合には、そうでない場合よりも感情労働が有意に高く実施されていた（ $p < 0.01$ 、 $p < 0.05$ ）。さらに、苛立ちを感じた看護師は、正確性が高ければ「探索的理解」と「深層適応」が多く（ $p < 0.01$ ）、悲しみを感じた看護師は、認知的許容量が高ければ「表出抑制」が少なかった（ $p < 0.05$ ）。また、嬉しさを感じた看護師は、認知許容量が高ければ「表出抑制」と「表層適応」が少なかった（ $p < 0.01$ ）。これらの結果から、看護場面に対する看護師の認識の仕方によって感情労働が異なることが示唆された。

研究Ⅲ. 看護師の感情労働に影響する状況的要因

研究Ⅱで得られたデータから、4つの看護場面（コミュニケーション、生活援助、患者教育、診療補助）における看護師の感情労働を一元配置分散分析によって比較し、さらに、各看護場面における患者の状況的要因（患者の年齢、性別、感情、ADL 介助）と、看護師の状況的要因（看護場面の認識、気分、受け持ち方法、医療者の存在の有無）などが看護師の感情労働に与える影響をカテゴリカル回帰分析によって抽出した。その結果、看護場面別の比較では、生活援助場面よりもコミュニケーション場面において、「探索的理解」と「ケアの表現」が有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。影響要因の抽出では、特にコミュニケーション場面において、患者の平穏な感情が「ケアの表現」を促進させ、患者の怒りが「表層適応」を促進させた。

【総括】

研究Ⅰでは、看護師の感情労働を構成する要素として、感情表現に該当する「探索的理解」、「表出抑制」、「ケアの表現」と、感情コントロールに該当する「表層適応」、「深層適応」の5因子が明らかにされた。研究Ⅱでは、看護場面に対する看護師の認識の仕方によって感情労働が異なることが示唆された。研究Ⅲでは、看護師の感情労働が看護場面によって異なり、患者の感情などに影響を受けることが明らかにされた。これらの結果を踏まえて、患者の状況を起点とし、看護師の状況を経て、感情労働に至るプロセスを示す「看護場面における看護師の感情労働モデル」を構築した。本モデルを用いることによって、看護師は、ケアを提供する際の患者の感情と看護師の感情労働の関連性などを分析し、看護師の感情労働を評価するために有効に活用することができると考える。

論文審査の結果の要旨

看護師は、患者との相互作用において、自分自身の感情状態をその場に応じて調節しており、提供するケアには感情的な関わりが含まれている。Hochschild (1983) は、仕事上で求められる感情コントロールと感情表現から感情労働の概念を提唱している。しかしながら、看護師の患者との感情的な関わりについては、その重要性が高いにもかかわらず、感情労働の観点からは分析されていない。そこで、本論文は、看護における感情労働モデルの構築を目的としている。

具体的には、看護師の感情労働を測定する尺度（Emotional Labor Inventory for Nurses : ELIN）を開発し、5つの構成要素（探索的理解、表出抑制、ケアの表現、表層適応、深層適応）を抽出した。また、看護師の感情状態、看護場面に対する看護師の認識、看護目的、患者の状況など、感情労働に影響する要因を明らかにした。これらの成果に基づいて、患者に関わる看護師の一連の行為を解釈する看護における感情労働モデルの構築を可能にしたと考える。

本論文の臨床上の意義としては、まず、人間関係を重視した看護師の行為を感情労働という側面から客観的に評価することを可能にしたことである。次に、看護師が自分自身の感情労働を自己評価することを可能にしたことが挙げられる。さらに、構築した感情労働モデルを用いることによって、さまざまな看護場面を構造的に把握することが可能となるであろう。

以上から本論文は、患者や家族の感情的支援を解明するために有益であり、看護管理や看護実践に広く貢献するものと考えられ、博士（看護学）の学位授与に値するものと認められる。